

パリの図書館と 大学生

山 本 浩 三

パリの図書館

パリには多くの図書館があり、外国人でもかんたんに利用できるものでひじょうにありがたいと思いました。

私は、パリ大学法学部図書館とサン・ジュヌビエール図書館（パリ大学附属図書館）ならびに国立図書館（ビブリオテーク・ナシヨ

ナル）でもっぱら勉強しました。

法学部図書館は、パントンの前の法学部の建物の横にありま

す。新しい建物で、学生の読書室は、地下の採光に工夫をしたあ

るい部屋でしたが、換気がわるく、冬には人い

きで頭がいたくなることがありました。私たち大学教授には「サレーユの部屋」で読書することがゆるさ

れるのですが、私は何かと便利なので学生の読書室を利用しました。周囲のかべに法令集、判例集、辞書、年鑑などが自由に利用できるように並べてあり、カタログも整備されていました。

人種はまちまちで、白人や黒人にまじって東洋人の姿もちらほらみられました。いつ行ってもかならず勉強しているヴェトナムの学生がいて、一度話しあおうと思いがながらついにその機会をうしなったことが残念に思い出されます。

ドイツ語の刑法の教科書を読んでいる学生がいるかと思うと、教授資格試験を前にして十数人の男女が国際法の本を山と積んで猛勉強している風景もありました。ある日、一人のかわいい女子学生が赤い毛糸の帽子をかぶったまま読書室にあらわれました。勉強にあきた男の学生がそれをみつめて鉛筆で机をたたきはじめました。二三人がそれに呼応しました。しだいにその数がふえ、手で机をたたくものもあり騒然となりましたが、中央に坐っている司書は知らぬ顔で事務をとっています。「シャポー」「シャポー」という声が出はじまりましたが、その女子学生は気がつかず本を読んでいた。ついにみかねてアルジェリヤの学生がその女の子に帽子をぬぐように注意を与えました。憤然としたその子は本を返えすと席をけて出て行きました。もちろん帽子をかぶったままです。出口の所でニコッと笑って手をあげたので歓声がどっと上りました。古い文化国の学生の躰けのきびしさを知らされたひとときでした。

サン・ジュヌビエール図書館は、法学部の図

書館のとなり、パンテオンのよこ、コルネーユの像のまえにあります。いまから百年まえに建てられた大きな二階建の図書館で、外の壁に一面に古代からの世界の学者の名前がぎざざであります。この図書館を私は一番利用しました。古い雑誌がわりにそろっていることと本が早く手に入ることと夜十時まであいていること、そして貸出係の人びとが親切なことが私の足をしげく通わせた理由です。もっとも試験前は四時ごろまで満員で、立つたまま本を読まねばならないこともありました。

この図書館には女子学生が多く、エリザベス・テラーそっくりの美人が前にすわってしばし目をたのませてくれるかと思うとアフリカ美人のあまりにも強烈な体臭に席を変わることをよぎなくされたこともあります。人前にもはばかりず愛情を濃厚に表現するというパリの淳風美俗はこの図書館の中でもみられました。小さな声でささやかれるよりは唇をあわされている方が実害が少いので気にとめないことにしていました。

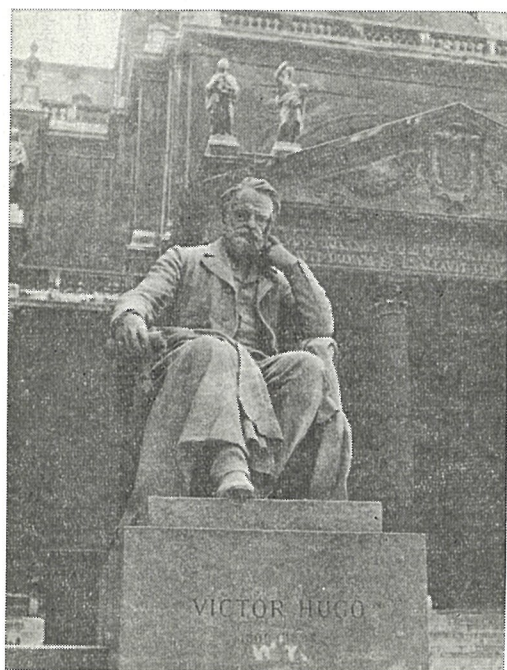
この図書館の欠陥は、夜、電灯のくらいのことです。フランス人は賢明な国民で、むだなことではできるかぎりさけ、電気や水などの使

用にもこまかい神経を使っていますが、この図書館の照明のくらさだけはいただきかねました。交通事故や犯罪防止のためにヘッドライトのいらないほど街灯を明るくしている国民が、もっと室内の照明に配慮すれば、あんがい多いフランス人の近視も減るのではないかと思ったりしました。

この二つの図書館でみあたらない文献を読むために通ったのが国立図書館です。この建物はナポレオン三世の時代にた

てられたもので室内の装飾もこつており、疲れると美しいドームの天井をながめて目を癒しました。図書館の高い天井の効用にここで気がつきました。そんな古い建物なので座席は三百あまりしかなく、

午後二時ごろになると満員になり、空席ができるまで外で待ってなければなりません。利用者は年輩の人が多く、レジオン・ドヌールの略章をつけ微くんをただよわせた老人を隣席にみつけることもありました。蔵書の豊富なことはさすがで、長年探しもめていた書籍がかんたんに読めてパリに來たことの幸せを痛感させられました。新聞雑誌室は別になつていますが、きれいに製本された百年前



ソルボンヌ大学構内のユーゴーの像

の新聞が五分たらずで持つてこられたのにはあきれてしまいました。日本にいてフランスの制度を研究することの情けなさをしみじみ味ったしだいです。入場者には一定の資格を必要としますが、入場は無料です。

おもしろいのはここだけが便所の使用がただなのです。サン・ジュヌビエール図書館では便所に入ると十サンチームいり、法学部図書館では便器の使用料が五サンチーム、洗面所の使用料が十サンチームで入口に使用料を徴収する婦人がすわっています。手を洗わないのは野蛮人のように日本ではいわれますが、洗うと洗わないとは十サンチームもちがうとあれば一考したくなるのも人情でしょう。それかあらぬか使用後手を洗わない外国人をよくみました。日本のある大学の先生がフランスの婦人が便所から手を洗わずに出てくる別の理由を得意になって教えてくれましたが、こんなお粗末な先生の話をしては書きますまい。

パリの大学生

パリ大学の講義は儀式的です。まず金色のくさを胸にぶら下げた人がおごそかな顔を

して教室に入ってきて黒板をふいたり、椅子の位置を直したりします。これが教授かと思っていたら、あとに黒と赤のガウンをきた教授が入ってきました。さきの金くさり氏は教授が腰をかけるのを助けたのち、またおごそかな顔をして出ていきました。教授が入ってくると学生は一せいに起立します。教授が「おすわりなさい」と言うまで学生は立ったままいるのですから神妙です。六十分講義で、教授の五分や十分の遅刻はゆるされても、学生の遅刻は仲間の学生たちのきびしい非難のまなざしで迎えられるのです。私は故滝川幸辰が教授が遅れて教場に入ってきた学生、講義中に退席する学生をきびしく叱咤されたことを想い出しました。パリ大学ではそれを学生たちじしんでおこなっているのですから学生の自治も年季が入っています。

大学構内に入って目がついたのは、学長各学部長名で出されている大学内において一切の政治活動を禁止する掲示です。かつて学内における政治活動を理由に警官が学内に殺到して負傷者を出したためにとられた大学自衛の措置だそうです。そのためか学生が全面的に支持しているとも思われないド・ゴール政

府批判のビラも学内ではついにみい出されませんでした。入学式に文部大臣が来るというので前夜から警官がソルボンヌの周囲を警戒している国です。学生の政治活動も窮屈だろうと思いますが、フランスのみならず世界の未来の指導者としての自覚と責任をもって勉強し行動しているのがフランスの学生であると言えましょう。

かれらの生活について感心したのは、学校給食が大学生にまでおよんでいることです。オードブルからデザートまでついた、レストランでは五百円ほどとられる栄養価のある食事を学生には百円ほどで与え、差額を国が負担しているのです。この恩恵に浴するためパリ滞在の日本人の中にはソルボンヌの学生の身分をとる人もあるときいています。高度成長で大国になった日本の経済力をもってすれば学校給食を大学生まで延長することはそれほど困難ではないと思われます。××反対というばかりではなく、「学校給食を大学生まで」という要求の一つも学生の中から出てきて不思議ではないと思います。

(法学部教授・憲法学)

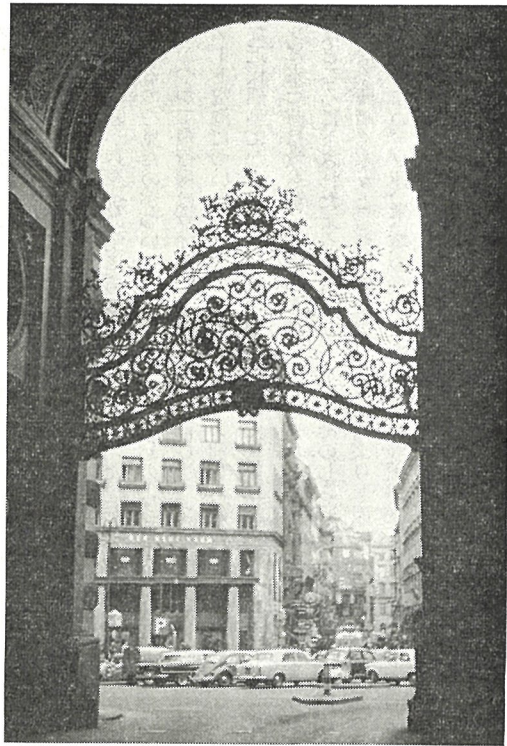
再びウインを訪れて

林 達 次

昨年九月に曾学の地ウインを再び訪れる機会を得た。京都に生れ京都に育った私としては、東京に次いで長く生活したところはウイン以外にないので、言葉では表わすことの出来ないなつかしきを感じるのは無理もないと思う。

八月三十一日、大谷菜苑の合唱団の人たちと全米にわたるコンサートのスケジュールを終り、ロサンジェルス空港より帰国する一行を見送ったあと、京都音大の伊吹君、岐阜大の本田君との三名でニューヨーク経由、ヨーロッパ旅行に出発した。両君は共に欧州は初めてなので、私が案内役ということになって一路ロンドンに向った。ニューヨークで

一泊、ケネディ空港からロンドンまでジェット七時間の旅は本当にあっけない早さである。旅愁を感じるひまもない。ロンドンは既に初秋であった。うすい霧のヴェールをまとった、古い都のただずまいは、一カ月アメリカを旅した私たちの目には何と美しく、心に安らぎをもたらしてくれたことか。古い歴史を秘めた町のただずまい、黒い箱型のタクシー



ミハエル広場

一等、頑固なまでに古きを守ろうとする態度はわれわれも学ばなければならない。余談になるが、この旅を終えて京都に帰って、駅前のタワを見た時は本当にがっかりした。ことに毒キノコのような夜景は、それ自体たしかに、一つの美しさであるかも知れないが、京都には似合わない。ディズニールランドのお伽の国にでも寄付した方がよさそうだ。

さて、予定通りバリ、ハンブルク、ベルリンときたあたりで、私のウインへの郷愁が猛烈につのって来て、もうどうにも我慢ならぬ状態になった。最初のブランでは、このあとフランクフルトからラインを下り、ケルン、ボンを廻ってウインにいく予定であったが、何年もの間、再び見たいと心から願っていたウインの町が僅か数時間のところにありながら、他の町を廻ることは、も早や生理的な苦痛に近くなって来た。これはもうたまらぬというわけで、両君には申し訳けない仕儀ながら、ウインへ先行することにした。

2

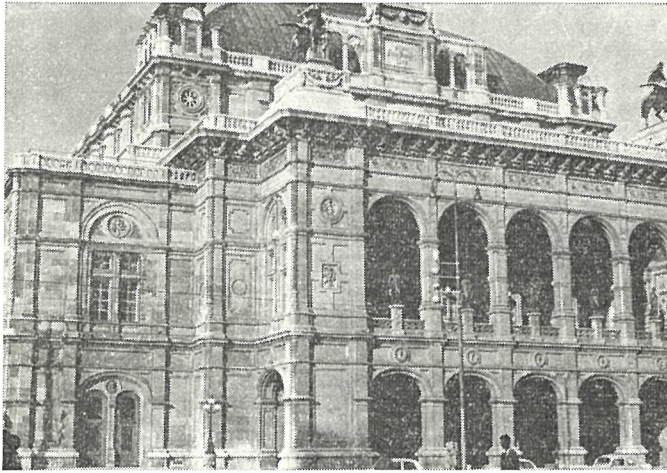
フランクフルトの空港で、オーストリア・エアラインに乗りかえのため待合室でコーヒー

をのんでいると、和服姿の老婦人と老紳士から話しかけられた。名刺を戴いたので見ると大谷大学の西谷啓二教授御夫妻であった。御夫妻ともウインは初めてなので、ことにホテルも予約してないので、宜しければ御案内をお願いしたいと言われるので、喜んで同行させて頂くことにする。飛行機はモーツアルト号という。いよいよオーストリアに近づいた感じである。天気は快晴で、チュービンゲンの森を越え、パッサウの辺から銀色に光っているドナウ川にそって下る。右手の鋸^{のこぎり}のようなザルツカンマーゲートの山々が見える。六年前帰国する時、汽車の窓から夕焼の空にあの山々がそびえているのを見たのがついこの間のように思える。やがて飛行機はウイン郊外のシュヴェヒアート空港についた。数年の間に空港は見事な近代建築になっていた。この前初めてウインに来た時は秋も深く野中の堀立小屋のようなところに下されたような気がした。人氣も少なく薄暗く寒々とした印象だった。それは無理もない。ソ連、米、英の長い占領が終り、軍隊が引き上げ、ナチスのウイン進駐からいえば十数年ぶりにオーストリアの主権を恢復してから旬日を経ているなかったの

だから。空港からエアーターミナルへの道もすっかり制備されバスは百キロ近いスピードでとばす。道の両側に新しい工場が続々と建設されている。この辺りは石油が出るので見事な製油工場が出来ていた。エアーターミナルのあるウイン南停車場もすっかり見違えるようになっていた。あの頃は映画の「第三の男」の中のシーンにあったように爆撃のあと生々しかったのに、と思う。くずれ落ちた煉瓦の壁が裸電燈の光に照されていた。市の中央部に入ってもネオンサインの数も少く、華やかなパリから到着した私には廃虚の町のように思えた。しかしある町角をまがった時、忽然と幻のように白亜の殿堂が燦然と照明の中に浮び上っているのを見た時の驚き。これがその前日再建復興されたウイン国立歌劇場だった。第二次大戦も末期、伝統を誇ったこの歌劇場も空襲のため一夜にして灰塵に帰した。そのしらせはオーストリアの国民のすべてに何よりも深い悲しみを与えたが、直ちに再興の計画が立てられ、戦後の苛烈な占領と物質の欠乏の中に営々と建築が進められた。

十数年を経て再び往年の偉容をとり戻した時はくすしくも、占領軍が撤退し、この国の

主権が確立された時であった。開幕第一夜は、ベートオベン（Beethoven）のフィデリオ（Fidelio）であった。四万の夫フロレスタン（Florestan）を救うために男装して単身敵中に入ったレオノーレ（Leonore）は遂に圧制者ドン・



ウイン国立歌劇場

サロにピストルをつきつける。その時高らかに解放軍のラッパが聞え、舞台は暗黒のまま有名なレオノーレ三番が演奏される。崇高な愛と自由の勝利を歌ったこのベートオベンの

作品こそ、この記念すべき第一夜を飾るにふさわしいものだったに違いない。

それから六年を経て久し振りに見る歌劇場は、白亜の壁も灰色に変わり、花やかになった街並の中にすっかり落ち着いていた。町の中央を通るケルントナー通りは大変にぎやかになり、ショウウィンドウも明るくなったが、何より車の多くなったこととタクシートの飛ばすことは全く驚く。一方通行の細い道を凄いスピードで走る。やはり世間がせちがらくなってきただろうか。全くはらはらするが運転手君は日本のカミカゼよりましだろうという。カミカゼはゼンガクレンと共に戦後の世界語になったようだ。カイザーヨゼフ停車場の傍のホテル・モーツアルトという中級のこぎれいなホテルをとることが出来て、西谷先生御夫妻にも喜んで頂けたのは大変幸せであった。

3

翌朝は早くからオペラの切符入手のために出かける。ウインには国立歌劇場の他に国民歌劇場がある。両方とも七月、八月をのぞいて無休であるがなかなかいい切符が手に入らない。出し物は二週間分づつ街に掲示され、切符は五日前の午前九時から歌劇場で発売されるが余程早くから並んで待たないといひ席が手に入らない。この馬蹄型の劇場は、観客にとつては誠に不便なもので、舞台全部を見るためには正面の席からでないと駄目である。ちよつと横の方になるともうステージの半分ぐらしか見えない。天井さじきの横手の方になると、もう全く聞くだけになる。よくしたもので楽譜をもち込んで聞く学生やファンのためにこの席では小さなあかりがシートにつくようになっている。しかしわれわれにとつては、やはり見えなかつまらない。舞台が半分ぐらいで主役が見えかくれているとイライラしてストレスがおこってくる。戦後ドイツの歌劇場は再建の時ほとんど日本のフェスティバルホール式に改良しているのだが、このウインは頑として古い様式を守って

いる。ただステージは最高の設備をもち、あらゆる操作や照明がディレクターのボタンひとつで音もなく出来る。中幕の前でアリアをうたうと、幕のうしろで金槌の伴奏が入るような事は絶体でない。

折よくプログラムの予定はなかなか豪華でドン・ジョバンニ、ばらの騎士、ファウスト、ヴァルキューレ等で、毎日、日参せねばならない。八時半に切符売場に着いて見ると廊下は既に長蛇の列である。十年一日のごとしというが、全くここでは十年一朝この光景が繰り返されているのであろう。学生あり、デブのばあさん、チロル帽の爺様等々、極めてのんびりと列を作っている。ここの有難いことは、われわれ異国人に特別サービスするでもなく、差別するでもなく極めて気軽にとけこめる空気がある。切符の売出しを待ちながらその人たちの話を聞くのも楽しい。歌手の批評から、カラヤンの辞職問題等なかなか面白い。そして外国人である私に「ちょっと、順番を頼みます」等と言ってタバコを吸いに置かけたりする。

ようやく切符を手に入れて街に出る。九月のウインの空は真青に晴れて爽やかな初秋である。十月末になればもう毎日雲にとざされ青空を見ることが出来ない。人々は公園に街路に日光を楽しんでいる。ケルントナー通から前に住んでいた下宿への道を行く。毎日毎日通い馴れた敷石の道、公園のベンチ、ブクームスの石像等、この間に数年がたったとは信じられないほど昔のままである。小学校の校庭の藤棚の下を通り、パン屋の横町をまがると、もうそこは私がかつて一年以上を暮らした所だ。こわれたエレベーターは相変らず網戸の中にほこりをかぶってぶらさがっている。階段を上ってベルを押すと、たしかにある。ビュヒラーさんのしわがれ声がしてドアがあいた。しばらく余りの驚きに声も出なかったようだが、「ハヤシノ」という声とともに、このふとっちょのお婆さんは私の首玉にとびついて来た。

この孤独で、だが陽気な老婦人は少しも変っていないかった。私の住んでいた部屋は、その後イギリス人に借したが、やはり日本人が

いいというわけで大谷大学の雲井先生がウイン大学に研究中、現在在は声楽家の佐藤さんという女性に住んでいられるそうだ。余りきれいでない台所の椅子に坐つて見ると横につんだ新聞紙、茶碗、テーブル掛等。昔のままで、忘れていた記憶がよみがえって来る。鍵を部屋においたまま外出して夜おそくかえり、雪の夜寒さの中で困ったこと、勉強がはがどらず苦しかったこと。言葉が最初の間は不自由でつまらぬ誤解から喧嘩したことや、朝比奈先生の忘れもの奈良漬の処置のため、その当時少なかった日本人留学生全員を召集して相談の結果、半分食って半分ミュンヘンの先生のホテルに送ることにして、お茶漬を作ったべた時の美味しかったこと等思い出はつきない。

ビュヒラーお婆さんともつもる話に時を忘れて外に出ると、ウインの町は既に夕暮だった。

明日は恩師のグロスマン先生に再会出来る喜びを抱きながらホテルに帰った。

夕焼の空にシュテファン教会の塔がシルエットを作っていた。

(校友・京都女子大助教授)

ケーリ家の修学旅行

オーテス・ケーリ



ポセイデンの寺でのケーリ家
エレン、アン、フランク、ベス、アリス

1
まる一年間、日本の地を去った。七年ぶりの一家としての帰国の機会であった。七年前は母校アーモスト大学で日本文明に関する講義を二つ担当させられて大変な駆け足で動かねばならなかったが、今回は初めてサバティカル（研究休暇）を貰うようになって、前に

も二、三回勉強したことがあるエール大学で腰を降すこととなった。

一月から十二月というような期間であったので二つの学年度に跨がってしまったが、それらも必ずしも悪くはなかった。さすが世界の大大学にいと容れ気的なにも心理的にも身体で受けるものが大きい。アーモスト館で戦争の直前の私の先輩者であるジョン・W・ホー

ル君（現在エール大学教授・日本史担当）の世話も大きく働き、エール大学の十二のカレッジの一つにゲスト・フェローとして招かれる光栄を得た。また同志社で私がやろうとしているアメリカ史関係のことからアメリカン・スタディズの方にヴィジティング・フェローとしても招待され、自由に議義やセミナーに出入りできるようにした。なお図書館で小さな部屋をいただき、本を相手に暮らすこともできた。

このゲスト・フェローというのは専任のエールの教授らがオックスフォードやケンブリッジ大学と同じようにみんなどこかに籍を持つていて月に何回かシェリー酒と夕飯の会を持ち親しく交わり、誰かの珍しい旅行話や報告を聞くというようなフェローシップを持つものであった。なお私の属していたモルス・カレッジというのはエール出身のモルス符号でよく知られている電信の発明家から名前をとっているのがごく新しく、サラニンの設計で変った近代的な建物であった。

サバティカル・イヤーで帰国するのでそれがサバティカル・イヤーにならないようにと挨拶状に書いて出た私は思わぬ所でつぎつぎ

といろいろなものをいただいた。もちろんその一つは旅から出る経験であった。

2

私は運がよくもう既に世界を二周し、太平洋は船でも飛行機でも何回も渡っている。特に印象に残るのは十歳の時に父に連れられてシベリア鉄道でアジアの大陸を二週間かけて横切り、ヨーロッパの各地を訪問してアメリカに帰国した旅であった。これはいわゆる満州事変が起る六週間前のことで、親父にとつて三度目のシベリア鉄道の旅であった。私もこれを想いつつ子らに何らかの頭に残る経験をさせたいと思つて、ヨーロッパ・アジア旅行を日本への帰りついでに組んでいた。特にねらつて夏をはずし、ヨーロッパにツーリストが少なく、値が下がっている時にしようとした。これは少しはずれたが(十二月、一月のヨーロッパは案外暗いもので私はローマに着いて初めて太陽を三週間ぶりに見たようなことだった) 愉快な良い旅行を組むことができた。

夏頃から四人の子らにそれぞれ担当の国や地域を決めて手に入る本や百科事典程度の勉

強を重ねたつもりであった。女房はフランス語が強いので九つの一番下の娘と組んでオランダとパリを担当、長女のベスはイタリーを引受け、次女のアンはギリシャ、そして長男フランクと私の男子組は語学に弱いせい(日本語を除く) イギリスを引受けることになった。

この計画は思うほど行かなかったが少なくとも子らの心の準備にはなつたと信じる。なお何よりも助かったのは親戚の方からの予算援助の具体的な申し出であつたが、私らの予算で到底できないことをこの申し出で実行できるようになり、最近はやりのレント・アカー(借り自動車) 制度を四カ所くらいで利用することとなった。

ロンドンでは例の大英博物館のすぐ近くに宿をとつた。B+B(ベッド・アンド・ブ्रेックファースト)という制度でできるだけ安い所をねらつたところ、イタリヤ人がそれを経営していてびっくりした。なおその名はオリンピアというギリシャの方から来るので、さすが驚き、親切で山ほど朝食を喰わしてくるので晩御飯までカロリーが充分であつた。ロンドンの地下鉄は便利で有名で、街も

面白く、言葉も分り、四日目になるとすっかり英国さんの話を受けて立つて、こつちも英国弁が出たようなこともあった。英国さんの例の冷たさは有名だが、道案内とか困っているような時には実に親切で日本と似たような感じを受けた。

オランダに飛ぶのが厄介で、ロンドンの飛行場の税関を通過してかんづめになつたところ何時間も待たされた。行先はアムステルダムだったが、霧と雨で始めはベルギーのブルッセルズ、そしてドイツのドセルドーフそれからオランダのノッテルダムとつぎつぎ変更になつていった。もちろんアムステルダムまで運んでくれるのだったが、とうとうブルッセルズから四時間ぶつとおしのバスでアムステルダムに着けてもらった。二日間居たアムステルダムは雨が一度もあがらなかった。と言つてもアムステルダムは非常に気に入つた。運河が多い町で四、五階建ての古い家がちぐはぐに軒を並べて、街を見て歩くだけでも充分な御馳走だった。道案内その他で十何名の人に話しかけなきゃならなかったが、通りがけの職工さんのような君までも立派な英語が使えるのに感心した。また、反ドイツ感

情をあれほどきつく持つ理由も分るような気がした。

非常に住宅問題が出ていたので、女房が関係している *Excerpta Medica Foundation*

(世界各国の医学雑誌のアブストラクトを集め、訳し、出版する財団で、彼女は日本語版を前から担当している) の友人の「家」に呼ばれた。行ってみれば三十トンくらいの船であつた。木造の機帆船を買い上げて、中を日曜大工式に暇をみてすっかり改造して立派な住宅にしていた。聞いてみると順番を待てばとても住居は当たらないのでとうとうこれに気が付いたという。電気はないがコールマン・ランプで充分明りがつくし、プロパンで立派にやれる。水は三日に一度くらい向う隣りにホースを引いていただくようになっていた。郵便も然り。これで四年目だがまだ税金はかからない。オランダはそこらしい民主主義で、選挙の時には必ず投票しなければならぬ。その時だけ何キロもアムステルダムを街を渡ったところで投票して来ると言う。ヤキダマ式のディーゼルエンジンをはずしてしまっているが、そのうち小さなエンジンを入れて動かせるようにもすると言う。御主人は

本屋におつとめで、奥さんがオランダ本部での日本版担当者。坊や一人の立派な共稼ぎ。こつちもすっかりフアンになってしまった。

3

パリよりローマの方が私たちの旅行には良かったが、その間にスイスのチューリッヒへ行き、同志社でも教えていたコーラ家のところに御厄介になった。丁度わがアーモスト館と似た二十名位の国際寮の館長を兼ねて講義をしていた。日本からの学生も二、三人いた。一日フォルクス・ワーゲンを貸してもらつて、リギーというアルプスの一つのふもとまで行き、十何キロのケーブルカーに乗って頂上まで行けた。千四百メートルの所で雲から出たところ、アルプスが一連に並んで手に取るように見え全く素晴しかった。小さなフォルクス・ワーゲンに六人も乗せるのはちょっとのトリックだが後ろの窓の下のほり棚に一番下の子が入るとちゃんといけた。この術をローマ、アテナ、バイエルンでも使った。

ローマで初めて太陽が出てき、私も旅慣れして相当動くのに上手になった。ただあの街ほど混雑してどこを向いても何百年、何千

年という物にぶつかって改造の余地の無いところはあるまい。そしてそれぞれの所を国が見ておかなければならないので大変と感じた。その点フランスよりも上手で親切だったと感じた。特にそういう国のもとの物は日曜祭日には只で市民やシースリストにおすすめるになる。早速初日の日曜日にシーザーやブルータスのフォーラムに出かけ、一日かけてこつびどく綿密にあの歴史的な昔の地を踏んだ。中・高の上の二人の子供が特にこれを御馳走のように吸い込んだのも歴史をやるうとする親父の自分の心を暖めるものであった。

ギリシャはたった一日だったが、フルに活用してVWでアクロポリスそして聖パウロが異端者のギリシヤ人に説教した実際の「アリオパゴスの評議所」の地に立った。自分は大分前より歴史から感動を受けているが、このような『知らない神に』と言う祭壇を見つけてギリシヤ人のシャレすぎている論理を責めたパウロの勇氣と力が、このような旅を通して子供らの頭と身体に少しでも残れば大金をかけても充分する価値があったのではなからうかと信じている。